志この乃やどの集　下

へ 4
4349
2

年々の秋や歌屋集下の巻

長歌みしか歌

初恋といふことを

おもふよりありかたふかんのかたふかれそれもも人にしられさらん年

忍待恋

人待てあかしは人やとかめんと待わひつゝ夜をふかしつる哉

待恋

久やくやいもねぬる夜半中くに出る月のさやの中山

はら節くもなひとまち侘し夜のかねをきく夜のふけゆく

忍恋

人に知らす昔なからの年は庭ゆく河にゆくしらみ

從五位下藤原朝臣土満詠

故 先光清風氏 大正十三年十月三十日 先光華氏寄贈

へ4 4349 2

門號 へ4 4349 巻 2

ぬば玉の夜の月影は都にくもらなむ見てかへるらむ人のためにも

不逢恋といふ事を

あはずして恋ふる心は涙のみ袂にかけつゝきえもやすらむ
二はしにかけし末まで契りをば我にかへすな神さへもはるゝ年

逢不逢恋

中々にあふよはかりはみらればやとははかなき夢に思ひなしても

逢恋

和が心かへの山のくもらねはあふみの海に浮かべて見えやせむ
風はやみよるをまちえてこそおもひしか袖につゝむ雲のわかれこそあれ

別恋

何ごとははかなき夢のうちにしてきつる我が人のなさけなるよ

いかにして君がかよひ来ぬ川ちて来しとよもしき袖はあけぬ

春恋

春されは物思はしくおもひ出して月みればあはぬ袖ぬれても
世にはかなきのみこそ我が恋ぞしるの春かゆへや
すのまきのたつきはなひを春雨のけふ時となく恋つゝ富
はかなきは苗代を田にひく見来のうちはすてのこ恋わたる
世のちとせまでる春の月をはかなやわかれもさくらさく

夏恋

我恋を袖にぬれつゝ風月の夜の花夜秋をいつとか待

秋恋

秋きたれかくる山のもみち葉をさかりこそおもひそめしか

おもきをハいつろふ山のもろちはな人みなかろきハ難ろなれ

人都来

なき人は山ふかく月のうちにはやせなかに人まちてふこゝろもなく

恨

おもいぬも思ひてし人の世の中やかて何とてそこらうらめしき哉

寄雨恋ともいふことを

そらなき我袖をなミたの雨にほしあへぬ袖をたにぬれて

忘恋といふし

つらきにハいまも我をわすれしよぬ世のあふやなむよの萩をおもふ

送去恋といふことを

かしほなきハや袖をわか何その深き人ハあふ都きめやも

寄花恋

咲ぬやなおもへハ風にちる花のちり来る川ち人の情ろか

寄月恋

待そはやも出る夜月の君をまつハかけゆく空もなかなかまち

ぬ濡る夜かよるの月秋の露わきたこぬ人さまハすこそあるまし

寄獣

枝きる紀木す猪をつなむきひのおやろき恋すれをするを

厭暁恋といふ哉

わくらはにあふよ我袖もわかるぬ暁にさすかなかけるそ

寄木恋

八雲は月ひくや松木の色さハみゆるといふかにそ我恋わしき

寄草

いかにせむ野中の草はおひてさへ刈られもせむ我恋くさのしげりてしげきを

思不言恋といふことを

言はいでは中々しのびてかくおもふ一言にても人にしられん

深更帰恋といふことを

妹が名も我が名もたてじやよふかき月こそ残れくらく寝屋をおきてわかれ

後朝切恋といふことを

是ほどに命をかけて逢ふ夜半はさかしく暁は物をはさらにまし

非心離

忘られて何かは恋ひん恨むらは袖と思ひ乱れぬ身をいかにせん

寄名所恋

あはでのみ行はぬあやし舟さへやのりの月日にはてむつゆの袖

逢久恋といふことを

逢おきし言の葉今は尽しはてゝ我の命さへをしけれはなし

久恋

心こそいろもかはらぬおもひきにきえてもおもひそめし我

梓弓ひけ田のしも母大和にかたまけよはおいそなるらや

通書恋

かくしつゝあひみむことはいつか恋しきらはかなくともかやむまし

聞恋を

音にのみ聞きてしやまむものするなに人のおもひけるを

逢不逢恋といふことを

ゆきくて世をやつくさむさえむと待つをと思ひてかして

寄川

天地のいかなる川にみそきはかきくきしわか恋やむときのあらむ

羇中恋

はるゝに海山はこえてきぬれとも恋ひのやみにはおくれさりけり

不逢恋といふことを

あふ事はなけて毎おもひ恋あちきなく我身の程をなけくころかな

後朝

夏の夜の思ひのほとの短かき夜のあけさせる川にかよふらむ

忘恋

宮にも我をわすれてはてくはわすれぬ身とならかりけるまま

秘恋

水そこにかくれてあさる鳥ならてかくれてこそ恋をはしのふなれ

来暮恋といふことを

夜昼にこそはあらぬあふせ我毎あはて今はぬと思へは

不堪待

恋しくては我月くれなは夕月のいてゝやはもの待ちはましし

寄鳥

春花も我ともに人やすしのひつゝひかりかはしあふきさらぬおもへは

川にもえともる我もおもひのほとくしも身をそめなるらむ

別恋

夏我ともにひとりなかくなかれてはなくもなくてまちたくも行く

寄山

あさとちふき人ありんをつくは山のかけもなけきのかけは志けゝむ

祈恋

すゝもなみたに志つみても思ひきやいのる神さへつれなかれとは

枕上恋

夢乃あとははかなくさめて跡さへす枕はかりそ床にのこれる

春恋

わかの京風ふかせてゆく松のはるかに人をこひわたるかな

見恋といふことを

ふねよひてしほかせハすみと甲斐なきの袖も見えぬ恋ハせしなかり

寄琴

七里乃記乃なかれの此世さやかにも人をこふるなしもゆる

寄桐恋

まいくにわかの思ひやいかにつゝいはぬをたのまんさひしきも

寄枕恋

出雲乃神にそ祈て一里に行て来て妹かわかぬるいまはあれ

おもひねぬる枕のうちはなれは信くおもふ風もなかむ

寄黄葉

神有月しくれし山の木のはの色にのみこそおもひわたれ

思不言恋といふことを

かくふるたのこひつゝきむ中にいひ出ハ人のうきねもなつる

待恋よみ

榊葉にゆふしてかけて八咫かゝみかけてそ君をまもるかみかみ

山

神代よりあまりをひさしきやすらふ山はいつまてかはらむ

暁

あかつきに秋はなりぬらむかねてきく鐘にあかつき月そかたむく

述懐

世中をうきものとのみ思へは神代のむかしを思ふあまりぬ

かへりみれは身のほとをわすれて思ふよそぬ世をしのひ

ちりはなれ人のためにゆきかふことにあまりのいとまと

の事とさへかきてよめるとて見をりもとめてよ

みける

まとゐきゝ心のゆくをおもふ人あら玉の年のはしめの梅のはつ花

吉備人土岐武雄かやよひはかり来てものかたりしけるに

いさゝの玉へ心さして川とて又秋はかならすと後の月のころに

いてあひてかへしはむつかしこれは忠て物かたりけり

久かたの月にきゝくへてよろこひ秋のちきりをとります

るなよ君やよるてゆくしもりけるかな

久方の天の川原にかよふ星も秋のちきりのかはりやはする

昔

みよしのの瀧のよとみはゆくとしなみに久しくなりぬ　芳生称

川

玉綺の川の瀬ひさしきなかれにはしをひきとくし神代ありける

わきもこすあ布みの海乃はてしハちすくなてもの川とそいへる
本作雅かハ近江の国にすみける時二月ハかり京へゆくとて
道よりて我ハかなしきをみすらんと言ひける
月の経とはまにみえける我ハ我とハさに我めおくらむ
紅葉の花まなる草薙の祓り乃ありける時
かきつはたの色をあらはして みるみちのはかりしへおとけ
侍まし 大宮御所にたてまつる

荒木田久政わかくよりわかく咲にきみかこの
はなよろしハなとと見つらむとなつらむとありし
の歌
後にしもかよはさりきは君をうらみつあはれになりぬとましと

武蔵の国のみちの辺を月かりてあやしきになるを
みて
いろかえぬ松のはきはし本のくれてあはれをしるぬ旅のそらかな
霜月ハかり鈴鹿山を越えてむかうてひとり行けり
ともなひてゆくことき山の大坂をつらひてゆくに
天龍川はあまたにてわたる所
久かたの天の我川をうきて雲ハそうちわたる所もよ四方のあまり
三年布河にわたる川
ちくさ丈里やいふをすく
世にしく我をたつねて百そやちくさの里のあはれなるもし
人乃もゆかり 相良海布をおくるとて

おほろにかすめる夜こそものさひしけれ枕の川瀬あひに袖ぬらしつゝ

残月越雲中といふことを

ねられぬ枕にうきくもいるらしあふみにかゝる月影

嶺林猿叫といふことを

見ひき此山のあらしにきこえて夕ゐる雲にましらなく

寄木無常といふことを

しらぬちふありやいふなるはてき此あるかなきかの世にこそありけれ

武雄か父にへかへる時よろひゆきてはまちあそひしに

かくくやかてといひてこれをとるとるに

しら梅吉備の中山行きて山ありけるをあはせとそおもふ

しら浪のみさき中いふところにて

しらは我が川なかあひにわかめ苗植ゑしに紅葉付ゆくを

おなしところの汐干にむかひて此の木末をひて

常ともかりて人のいまいか月夜の子やいふとき

しら風

みけむかし志賀の代ゝはにたる浪いよとのことよりてかへさるゝ

吉備人をもてよさはなりかひきて友せぬ我

ほみなきむかひきて我あはせ中あなむすひき河

ありしに

夏州の志らぬる我あふとゝせていへ月もあるにもてむかし

関

芝木われつゝ河の岸中に海守かりて水もともなねあかりの雲

かゝみ

言の葉にたくへる玉の声なきを見き神代のかたみなりける

五月はかり甲斐国人上野なにし香のみやこへおほかた

をたてまつりて二ヽ日かへしてかへされけるは八月はかり

かへてきてはま玉をのつかはけるを詠める時

ゆきかへるかひのわかれをとりかへて今もあはすいつみなりけむ

桜葉なといふところ

葉のうちふかきみなと苔をたつねてきめしまくらのかきあきたる

井

いにしへ山神のいにしへの旁はなくてあさきちの水のかけそたえけり

山家なるといふなる

はるさめしくもとほとめの小やの戸のゆふくれときわかくろきの声

敷智の郡なる大和天の神の神宝の玉ヽ年よめる

掛まくも畏しかしこし天地やいかはしめにといやみと

古きまてしぬ原日乃神をあかまつる中に八百とろいちち

よろつ神の神はかり枝にてまつり香を山のいすゑま

さうそにこに八月をちちてかへりてかへてけ

清しやさゝめのいはつみすまるあまを玉ひ

さうるゝ手向となるのみぬる雨にあすにまつるる

ふみしやとあまにのみつかひまたの海の底なるを

ここそつまつるに大神のとりといはひみそら尚の玉の

いろくまつる玉の光をまつりいやしかも今の世まて

をはさるうたを詠いてあさいそろ人のまなをめしえて
其をかつてみ来侍りしにみ玉つけはとふ守さゑてかな
うくにの破ひておほまれそれはことまり其をさ史いつ出
うち出る出ましてか了わ玉しろ木けやしろふ神なふ社つ
めひいよ務礼それ銭し毋あやうく久しみ世の人ならし
かなうるめをしもいひくみゑぬる程

中の尽といふところの神社に神宝ありいて川くまぢ
おほきなるいなひの大きさして大なるまの石ならく
石いふ鳴くて曲まる玉こそれあり知るところに祭ぬ
くはきほどのゆき穴あり色は白き青きはあること
うすれくさしろるかなあまきあり又これなす

あやしく多くもあるすくなきことありそはそ
此玉のおほ川の庄と出雲もしといふ所にて
いふなりまた此社よりきたの近宮といふところあ
りそこの玉の都ゆひしるしと海辺にたち出て
法則にそのきはめて神殿にをさむる也といふとぞ

おほ和の国葛城村といふところに伊勢の大宮
に神御衣を奉るとて機屋をたててある
天稚彦やまとたけるのみこと玉をゆたかに神ならう
おほなむちし神御衣をいまなほつくるみなつかたつる
ゆ玉つけみちはの國武蔵川の名くりはなてありけるあ
ゆ原川ありふみの浦名のとうなるこさなにまた本をて忌屋を

みてはきだ中花のかうきは美ゆ京ふるをさり人わ
いぬはたまかねふくなきてとあら妹さん日にハあまり日記思ふ毎
にいひはとどまてふくふはしの神をいはひてとしふとり
おもふすしやみわいかしらし

寄懐述懐せしふしを

身に残る老のよつひをわすれては境のみけそうみちは八はる

あはれなる家し女お世話さまかなしきを

めしやかまするふた夜の陰にみちきさおもふみのまつてあらん

はつきまつりし江戸へくだりける時 道のいくて布わ
ける日又ふて

かれくしも雲ゐはるかに思ひやるふたつなき富士の高ね山

小田原のすくひとくるまてさ夜といふをわたりて
ゆくて風いとさむし

さらは川舟川わたりてくるわはゆしのうねふるをう家

江戸にありて去年月ころより葉花をとこひ
てかららちにちせや名残もよそおをかてゆふまし葉の花

まだ木すゑりはしめてゆかひける時

世さし咲林のまつはちりくともいふしくまつふ花はまゆは美
かれる木ふかしれのあるらしとある
木枯ふみなあらしの風り我はてのこる鳥のひとつさ比し毎

伊勢の国にゆきける時 村田橋見うちけり屋といふ
ゆくてひける人にみよ見といふ出けれハよめる

あらふやふさ市のみ至うやゐる路体さくあやふりる世界とはすし
杉ちや村松坂にもわしてかなりきむやはる村杉掛
太平さくもかぞおくりける
中津川あちみを後久いつ人やむかう見えけんうきへいたま部るみ
ふみそうきひて思ふ体やよ見もあらしき女かくさはぬあの
社さいろいわ久るはあに来てあひ人けい其乃日の夜のうしはあ
千歳とけてとひみかて理兄かふかくにおもゐ玉部はで生
まへるゝる鬼の人も出にもわれすえておもへ学あさる代
さらやむるし母杉も何えぬるも
菊花を思氏んやわ陽えて春ふう夜し年体もして思ふ
卯つきハかてふ来りし来る人のかきふる花の咲くる

をえて云乃是ふのあ随し涙そおもふ月雪のよそめに
かゝるやいそれうのはるふやよ見えけるか夜し
月花共ひりもまうしぬ卯の夜ふハまふ兄ふも林やえ東ハ新
い物の人ふくりか原るとき尾張の玉名古屋をとい
ちけるまさ記乃こひふ田中道麻生か所川あまで
おく理尽こりしらや此思ひいてしよあ阿
咲る風乃さふこやの原宇は人るやわうるゝ人ハいふし
清共深やそおも肩伸いふし信乃和出を杉久やの田中の
原乃保のをちの飛さうし共雨もはるまを玉体この見ちふ
いて色ある川の枝花はり母つのまても石上布のさむしふ
る深やとまでふ心ち君も和花母杉やし心やほこ存もて

かゝる所をとさらに夏の日乃長閑なるに河風に吹れて是ハ
今ハ志ミあまたありて我ちとゆくほとにもちらるゝのかはり
足しけハわらハなしいふしへおもふハいま少しゝかりのきとめ
古乃ものかたりあはれなれ

池の宮乃乃跡をきゝてよめる

河内ひとつの国の中にあるてふ美しあさきもなし只うつ此国の花
久はしほそく此池ハ大名持すくなひこなの神代よりかく
やくはしまゝ神護のいとなみにしたかひつゝ男乃池をみ名をよく
吉き我女神池を名に分つ男神のこゝろちはる秋もなく
小さき谷ハけふ千早ふる神をまつりしめやかに露のまへ
やおけ美しきとおもひて見川ゝゝゝをみかさなるみけのわ

そけ里人の子女あまたよりてそこらなるさ水をくみ川にうつして
木のかけなる寺にまうてゝけふハ沖河なる所をみてかへる
美しき岸川もあかさりし志賀の浦なる浪の八重たちかへるとて
植木都のいかなる花の名ををしへてくれ馬乃あし川さふて我
岩ほやうつかくし侍し

いにしへの由千早ふる神のめくみにて男池の水ハ河せにかはりしを

此池ハもとハ遠江の国城国郡佐倉村といふところにありてそこに
いと大きなる池二つあり男池女池といふ年ことに秋のひ
かん神中日にいふ日に此神社の祭ありてかの池へ使者をつ
さむるならひあり其ハ此ハいり人のなくの曲檀に中らする
ほと即一飯をうへくつゝ入て是をかへすに幣といふもの半

三かさしらて便不居ゑて午の時ばかりにひとつゞ池に
うゑて池の中に持出て水底へおろしいれまつ見てとさ
むるぞさて二三日のうちに此川はかりすすむに浮ばいつれおく
れていつるもありとぞ是を見ざりきれば多かしねとく
見んやうにひてところどころとくとらぬまゐあり
十六日新宮にお日くらすくらもありしひとり八景池
にとまめるとおなりし水あそて今ハ女池にとさむとぞ

大海に見えきれとて

ありともえぬ深ハあらそとおふ青の瑠かや深あひにさん住みあまほし

きそらは月の夜亮の汗にて

ゆふぐれ浜辺中をゆく夜の橘ハ何さく実をへかく波しみおもふ

嶺のまゆにいてよみる

白雲も絶えまなき峯の松みやりは千代にまつことの葉をつくれ
影の露ゆらめて年経りける時はしかとて人ぞ知らむ

酒のみし人なりけり時の歌

忘れずにお思ひてる年こすきの木たかくれに深き来むすまで
にきめ枝のあをぞえむ知らしためならしいろそへぬ祝ひにこの川代に
かはることなく泉水ありのゆきそあり知らひてけふのよろこびたる
あそは難えや修とありや母

寛政二年十一月二十二日新宮へまゐりける出まちおる

み社をとへまつりてよみ侍る

かゝる時まつり母あやにかしこく天の下八重雲わけて神ぞまします

あまてらしける日の光このかげのみぞ世にかゞやきてひかりかはらでまし
ならしも千歳なるさかえは限りなきはかりなきみよのつは
きこえしにおもふ事はさかえのみ行末のみゆけるなるべしとあるけふを

伊勢の国能褒野といふところの倭建命の御陵といふあるを毎

にまゐりける時よめる

倭たけ美古のみことやまとはさこそなつかしくおほえますの國のはぬ
我世の陣中もけち戦やまするが敵をもとめて神すみにしみ
おもふ事あまたみるるいふき山をちかきはきていくるる神を
せむとしてふいかなるゆゑか神のみけ候まけ候まじきとも何ぞ
ここかく敵なきを御勢いはちひさき兵やその方ほとの何もおもしてり神
さり陣しぬ陣中にまで及ぶもうしきを出るる日さみこと

いそしたかみのみこと

羇中友にいふことを

宮中わかれかくて毎朝ひとりの私年中思ふも旅のうき身やあらぬ

陣中

さる事あるは神をまもるとよ思ふの後乃おもふ代にもぬるのさやけさ
ひさしくあふさりけるに神にふて神をおこひおみる
年をとちまちおなじ朱の色の家集れい
みなみとの大かけき陣ひのむあまり水かしこし神いらけ家ほに毎

異朝にしの忌日によめる

照日にし雲の衣をかく境あしちり都をもるこそに何そそ世の
人其なるは陽垣の出さしたときは加藤陣中にあいは口あ方

てあきらけき神わさ人の世のみ代なりし御ときわかれえはて
て秋きりのまかせするはらに大直日神の恵日やかしけみの
飛やてをかくれて乃すらとの文ふとりもてる梓弓ふみ
おもし石上ふる御神代の昔る居の行き草木の枝かく清
ひゆくし見れしてゐのくちいは古様しくしわかうしのみつ
けるかなし月の日に有来ふ

神教

深き世おもひ入てふ山川のふかきかたくもえたえわたる千歳
山の辺の水のうつろしきをいえこそなする五十鈴川ともえ千年

例鶴やのみきりを

おもふ深き姫きさに千代まよひふたつ正浦すの鶴のかりたやすの条

日

天地京飛ひ一枝を年ちる今あとよさらの照る日の大
こみ付
洲を

年秋ちるおちて常ちき川と見ゆるまゝみくまり山の末ちる志る雲

不盡の山残りの見る

打よする浪の国とあり秋の河と角田あ布ちかくふかしきさ
やに河水ともむし山は居ふかてあいともくは山のうえふめあけいて
あ菜そそ経雲る久え之る浪ふかし北ゆくすし花や末きみ雨
砂年春さりの秋衣天の使路の風見てそなこ見伝ゆくまに
来るて五月地る川のゆもき経るとぬるて志て事代布りて
つ母まりてみちる葉の秋にいくはふそゆ居いこ方ふなとき

阿白雲たつ八重の山よ峰ありさえ末になひくは
ゝ流れ出けるさまも天地のあひさる清中ものとなる
まつなし

暮村煙といふ題を

不士乃けふりハ夕のそらとなりて人の心のひく方の里のけふりたつ

扇乃絵に竹ある里

呉竹のよゝをいはひてすむしきこや松風のおとしるらむ

松積年といふことを

松乃色の雪にゆきにも立かはらぬハいく年の友みとせるらむ
ある人乃庭の松乃木を千尋くらふる木のはよ
め出たきふよふ見る

春の江のたなきさなきさにあそりして年ふる川はたつはすまなむ

紫式部の事に

紫乃このひとも大かたの筆のちくさのあとをみすゑる

三面大黒といふ

子ならおもいあしけ人の心のまもるとくみ川おもふ神

里竹

世々のいろをすむらん年も万代やすみの里の竹のむしろ立

神祇

人あつまる川の流ても空へこえ和乃山けまたる神のめくみのかる里
縁石川代に月の出ける世すみのえやあら人神のなへやぬさにめて

社

はゝ木ゝ芋の其代さへ之むとみつかなの此代にさかへし神のみかき

羇中夢中つくる哉

足曳の山こしの風におとろけは足柄る心ちは夏ありけり庵

石に見るる小篠美野としころ本ころのみえみゆ

しくいひかはして手あはさりけるをいとかしこ江戸へくて

旅中きて掛川の駅にてはし免て出あひてうちあけ

てかくらむひ之まゐるとき

小川しらぬあた見年さ中哉侍し春はやくいつきみ於るやまふ手

堀口勝延の庭に池をほりまて嶋山なとかまへを於らしく

路くりて心ところしにかくらむ記きて名を川けられ

其るみきさ刃きはかり人にあゆひそのところくに

川きよる名哉影にてよみよ番る時よめ名かゝらぬめきて

名名は観魚石躑躅岡紫藤橋尋芳径垂柳塘臨

海阜 脩竹林 鳴鳩園

芳れ孫乃まつ記春日平君か氷りありひて見れは海をよの

芽さくをとらふ春くし花久れまゐる名残いて見わたしの川く

みのうへにせきこてゐる岸の柳はあさ其心和みくちらひ手

峰ちるにいは忠和ありる芳縁の乃わ春れ心との咲花れ豪

哉かくはしみ嶋山年は極ひ可ら比垣都らする竹の林乃咲

の梢乃言さも中らふ不く鳴のこゑをとらし仙山乃得哉

ほりる見れはわさの京雲井波るかふ沖つ浪は霞かさくて

色に浜へあは太可渡きとる白浪のよるうへ可きえて 船さ水は妹か

よすゞむる流るゝ池の汀の大石におりゐてみれば水さゞみ
千かなる奥は母なき菜のちりうくの影も見ゆくめるの
ひかりは底ふかくしづめる玉乃白き砂のかゝるふうにやあや
にあやにたえ枯ともわかちなき石のやきはかれはに此みゆれ
きよみるらもろふくおもふをちかくしあそは年ゆやゆかし
のはなり

水さえる池の氷のうちとけてあらそへるかげのあやにかはしさ

扇乃地のみに賀茂の葵をすきいれたるにかきたる

うし

いく千代もえきかえゆくえ代にあゆみのかげゆかしからん

布士の山字筆にかけるさまをよめるうた

天の戸のゆく末しるく不二の高根雪を見て旅ゆるらのおもはさ

旅宿夢

たびゝの夢おいまは見えぬかりそめのやどもまつやいへに人のまつらむも

女村月見るかし年

月数へしらしや中たふれの色はは旅人の行衛をしる涙

ちかたころゆ野の末松坂にて君くり心でらる枕つるの

筆跡深きるし

はるかなるきみを阿神代のかしこき文字ちりぬちよわかき

末て母なからこゝろしきるし積久年のよろしき言の葉を

しのすみやひとえ好の磯さ汀らの筆ならへは紀わか

のら経末有おもしてる芦辺の牛ふて筆はし母さはす

おほかたも大神の昔ひけゆゑありてかみなびの神なり根に
あるくしき希ほしくおもふと見え松つの丹布作

八坂の大宮とをかみなへる時も侍る

掛まくも畏やにかしこき吾が此の神の大前にや天照に
かみの高き御の大八嶋国は称まつりて神風は伊勢の国に
しきまし給ふところ国なかれもこと伊勢の御ことしき
すめ国は久しくあり行末川ながく世かは幸ふちはふ神の御光も
まひて天くだり人をかしこみしてさくらのいすゞの川のほとりに
たゝへりの宮ばしらを太しり立て天地月日のごと毎り
古きまつる御屋みやところまでつかへ奉れや大まつりたふとし
もゝ千年ね思ひぬきかしこみまつりて守るのみ

まゐる

伊勢の御宮の森も松坂に侍りける時やまひの
おこりて母てうとふ

いつきさらは此ふるまつりしかはふりの神は世の中をまもり給ひける
おほしまきは今はかならずまもりてすめ神のいつくしみ
世ごとにわかれをしみてぞある

此ほとは昔の希かはらずあらたなる井手にありてやさしく
のみやばしら宮ゐかしこきすめ神のみかどの御こゝろよ伊勢
あらたしくはかつらかはたかくもとは末たかくよろしく書を
ちはやぶる御ゆきをまつるまでいてしこきあり
見まつりのかひもなさこの千年の栄えまさに我が世に栄ゆく

ちゝ紛もかくし母あ羅年ゆおこなふとも於きて都ゆゑ
ならぬ葉乃久ならぬ倚もし あれ志か侍る酒きゆ役なはるゝり
ぬるらぬし母あやなおも此て比るなゐ多まつらし此け多
なり母何なるも
羊も母来て現るきなむきをにみを比りし あつ比神代の侍字なね
かつは玉人のみ多りるゝ院をなゆみて酒乃こゝろうこ 己
ぬえてら来る
いく那宗古神おはし給し みきをゆ母志て見なきてさゝみつ
酒の名ぬひとつゆおゝき悟こならひて此志やと侍する事し人のとも（きゝ給ふ）
柿本の神の御うたに
言の波乃神ゆ来こ拝なゆ彡し 方の神を御序侍し此ら事しぬや

いにしへ翁の古事記傳の竟宴に志那都比古
神を
雲井路に志なふゆの風おはらふこそ月日の行もさやかにけれ
安慕多人指本稲比古か雲のたは忍多てにめとも君
となし之し 秋かはぬゆ山の八乃月ゆよみてむこせる
うへし
君ゆ之し雲ゐの月かり古の迹したゝ見よあ侍きと記とこそまて
あ都まの玉人かみ君雄か玉ちよ神乃ゆ人ちよ代を
いまき社さき乃跡ありきしとあひてむかみの末や人
ゆよくておくりなまるら才らし
終る志る多ぬこそ八乃社と侍りあふみちゆ侍付ゆ母まつて

もゝ美のまみ年のゐ年しるし

松年久といふことを

久かたの天のさひち中ころし神代のためしにはしらる乃　松

周智郡秋葉山にまうてし八月九日の日ゆ宮にて

はやあわて玉ゝふりより何らい人のまゐりけるを見

してくぬちの花とは春さるわかき年のいのち見て何

かきりなき事しまうてけむ九月八日あふのてしらぬ旅

と月おもふ秋はの山は木の何かやうけ山ならむ

久春たかくれいふる花年の里に御理山家にはまつ鮭

思ひきらふなおへ旅秋ふしらぬ秋は年のへふいをみち葉の

ひなもせかれはいきりなるぬあか山をこうし彼れの夫たな

神の美は都さかりゆみち葉の御日千代の韓の咲花の

かしこみくしく母なる人を見るも見ちまちに久しつちの神の

何ら彼の末のとをたる者まで年し母や我か

とみ内日利美やこも此と天の下出業の益人のすくにあ

南栄まふとみ大まへを年か見乃川のかへ足ひきのいは

此神これふみ給し玉まちなき山川乃八十国わたり

てぬ質のこらるの此の山は彼まあなくくる神のみつかひ

その此葉のとを花はあき時の川よりさうえ心まさしあ

栄波山まや万

死ぬる年山里ゆこをかまへし神のみつ乃おにはいふなり

氷口葦

難波江の入江はあしのさやくなる下葉をみて波やうつらむ

釣

わかれ京ゆ宇治川なみさわくみさひ都るあまや海のさまは古

暮漁舟

あかねみる夕浪ちとり鳴なるに泊すは海士の体きこゆ月なる西
呂ふうしの音きこえてみまうりきえかゆきうなる時
みなかた浦の舟ゝなりやかあわきへ月なる時ゝ家ゆゑ多いか
さ葉におもひを迎てその父の前のちゝゝ母のゝぬさと父のこと
しるまひかまひ彼ゝこ波のはゝ那ゝなくふ母共都ゆゑこひ
なか何ゝ思ひもなまよにかくしまのことおもひしゝ我思ひ
難くゝ春きられゆうらけゝ哉ともんゝすゝあしまゝ

あしひきの山辺母屋なりみ那きなか河さへ風なかりなく
なさ共と月をさ辺知ゆゑ残りつゝ共な母あはあゆおほ
秘の思ひゝわれゝてつゝぬ多共月も經ゆけ波あるまの音
葉へ経て神な月末都ゆくそゆみちゝゝの君なす
きぬゆ玉のこの道ゆく人のおもつれを我ゆや春く風まうゝゆを
わ那やまゝ川な梓弓おゆゝもきこえ都玉那さのつらひを
こ谷はさむすゝ家のまゆきゝまゆゝゆぬえなれゝ経なゝき
しゆゝ風さゆのあやにかゆしゝなるはもよれあく家
れはみひなはも月の久なゝまて鳥のなゝあなまの空を
久乃母おなをえ川ゝなきぬ丈松をちゝゝ共都ゆ

あゝなの志は寸はつりすゝゝりなる時

年月ハかう經きぬるにもみちハのなきにし人をいつとかまたむ
ほとゝきすなくねハきくもかなしみのみなりけるとき
京都をみつゝあはれ哀なる事にハもきのあはれつくしまゐらするにみとり
子乃はふこのときゆう難世らしおもひまいらせちゝの父の
父にも都へはしをハのほりし事も都のへたつましみあつけると
のとうかりき乃世はにハこりなれはもあるくたりけれ比かの事なし
國さうのさとをききもとれハかなりやのおとはもあひつきをお尾母
しく思ふしとるりし後しきやし妹のみこそハたゝにや
なけしみにおきて中々浅ましくもぬる哀なるたけはらなく
もはまてやいぬるちうはれおきて
志ゆすはかり父のみまゐりける時

雅けきかりし床の底さし父さきたちへとむかへしまゐらせね事はさむすへ とかし
五代にわたし事そものゝ大船のおもひなりかへらぬそくやしき
あらぬ年なれまうなけらむそりなる
妹の髪のかはいたくこれなきの日我細のこひちてたゝりめ久むしつ
やもをすれはハおもはる涙をさきあへぬ世をゆめの都へとものこと
なかりし中毎夏をもてなしにおもひえて物おもひは猶そかなしかりける
忌日に
きのふ事しおつるよしもなきさきあへぬおもかけ月日へたゝりさへをしる
とちの十月はかりみまかりけるとき
神無月風にみなりてきみちちるのそとも河へちる涙の袖
人のまつのよこえぬうらいくやさしき

けふとこのちる東にゆきける時よみ侍

又しばし世はながらへにかりしぬとあすもむ人のなごりとぞする
さそふのも人の歎にそへてよみけるかとて云つけて人
のみぞけむ行

かならず花をはなるるに及のほかに菴やあはれつかくてもよしや

加茂信幸家にてみまかりし時

しら川あるじ名におなじはしは岩はまさに筆にまさるを
大松も見えしきみは入日なれどいまはすはまつとの
つかのえはすはかなたうをもかくも出ではなくなりつ
夜のあけてをも浅きはいきつきをまさにて今までに君が宿
けふはすべて秋とやなりもすきとほるかみにをもてえぬ秋はきさ

むすばのきえ露しらぬ神ととふはたてありてみえけ
志ぬ思ひ
はかなさはおなじかるにちかひしかるたれもみし君やうらびき

伊勢人須賀直見がみまかりぬるときてはや給
の急なる折にてあひえしことをおもひいで

いはれのはかる老ものふくは中もはかなき世をなからみさらまし

加茂岑樹のみまかりけるに宇佐のかたてうちなき
まてをとる

たれのよにかなき人をはかなくもみえむらん思ひするかな

兒のうせにける時よめる

みどり子のはしれたわかこいは花のちるかもちてありきぬるをかたきものを

すきてやいぬるあらしなるはかれとも忘れやらで床の庭かきさそふ枕
にも彼らろつくてゆみにもさゝ文中にはこの家りやくるにや
門にいて我のしるし菜付てなしる心にもき住え見吹る物
のあまたり菜うる文にさうみおそうけるにもさしめとる
見え給ふ
いつはりは時いわかれ給ひてすこしあれ世中へは帰まてしくすし母

菅のゆうしの枕

おもふ家のはなまたもまさぬ秋の色も咲てなほにちるやうち梅を
秋の秋の花移る人ともあはと思ふるよみしるし人の世をとかりくとて

栗田先生か身の思ひにこもりける時よみおくりける
守る我また花ておちるおもひそ世の中のかゝるなるもいは君ともなる母の

高家定基かめのみまかりてきたりけるをみたまひ
ぬれきぬてとみてつかはしける
うれしさもおもひそかぬるいまはたや世にながき人とまたくはことゝは
やよひはかりのみたれけるをききて
とらへられて旅もちる花をみかへるとてあまたもれ
家持大人の忌日に人ゝうちよみける時よめる
春山のさきのさかりも雨にはあらなにも秋山のにほふ
いな母風にいはち花植てもそ木の花のちりのあま照り
かろひしき見るもみち葉のちりゆくら秋のすきなりしきゝ
おもひ王のこ年いまなれとならさか月はきたるとあり見せり
いとしうちまさしくやみもあかせにあれいともなあるこ

いや此住ところに玉乃年のはしめ世にふりしやもゆきは千寺川
久方よりしぎや万代久しく見る万
ときはかきはみまつりする時
身はつまをおこしこころにみしん人をしてはむかしの友とこそ見れ
はしのおもひなこ母君て仕へける時
年ごし歳は木さえぬ我身のうつしきは涙さへこそとまらさりけれ
はての御さすゆきて
弟に衣ぬぎて子等弟の後ては其人と為る涙のかきりなき哉
又のとし御歌
花の咲はんそいふさ中にに我弟は母はさらそそまりまし
美濃国人田中道麻呂の厚はの名古屋にありて

みまつりのはてきこしてよめる
芦原の水穂の国は人さはにみちてはあれども心ある
おやしんにおはしへ年ふる老ぬとも此まつみにおきて
行末之孫は神風の伊勢の玉乃をはての国こちく
我道に出こち様てある始ゆくさ母父さも其風のをさまに
いやその後しおやし君う宝伸びて古体中をとかくらに時す
まちまちにんは此付て皆おのもちすおもひ方けはりち
此を母をあつをけん此おもひけしかりとめるものを加
みちは年中も都手孫安と思ひまけ此らはとおきて
いやさらに思ひましてしてらしたらみにいますあつ座しき
われ皆がまみいや田中の年ちはや

七月廿一日の忌日に

秋ことにおもひし月日めくり来ていくたひ人の袖ぬらしけむ

はかなしやゆめのみまもりて又の年もとめくりのわ
さきけるやこれ

ことしもおもひわすれて一年のすきぬるはかなさを思ひこひしき
荒木田尚賢神主のみもとよりけるやうにしてある
其神典かく多くよみたまへりしかはみなことはに難れい
物かたり書にも用ゐてよみたる物あまたみちてける
こともあらぬかな
かの年中の行事をはしめとしてはちまきこともかきて
其外ちかきのかきしのかたみとて一冊をおくりけるにつけて

こ
書ともかきたまひしをみなもとをみて
きこしめすこそかたしこそあはれとつねに
京に於て都りける時まうなる加茂美樹の墓とこ
ろかまゐりて
うれしみの世人とてしきしまのみちは其のはしをいひさためまし
其変はしかの御月いひしとみにやすらひおもひてみた
かりける中きき
其中の人なりけるこそこゝろあはれるもはかなきにいるもをしむ
そのう月より女子のうきよりいりるを十月はしめ植
中にかくてをひくらしけるに
あるころ秋の露も花もおもかけはあるをとほぬ物にその風

十月ばかりおもしろきころ仏名ありける時

母みまかりし春は佛名にまうでし人の命の露とおかれしに

経の仏国の名ぞうかびのみぞはかなうぬれなしてゆかれ

とおもひける時

宇治にまうでけるにも母のことのみいとど母君おもしをさかぬ思へば

中の御ことかくいはれしけりあやしきまで思出いでてぞ聞えける

美しき月ばかりありけるを見てもむかしさくらの豊

麻呂かりけてうへる時にわかよみたる人の伝弘といふ人の空

なておくり来てわたくしにかなしき十月ばかりみまかり

ける中まぎてこの年のさかりはうしろみうしことにまかり

けるをあはれとおもひしところをすぐ中にて

思ひいでておなじ年の六月九日ばかりに見しやうなりと

そのころまでも人のつどひてうたよみける時法師のうちに

もみぢを見しは夢なれや思ひいでてよめる

思ふらん事も見えぬ夢中の道のうへおもひ思ひいづるとおもはおやさみ

すむかの玉葉玉樹の中の子の極楽をきるきと聞かり

うつろはしく学びの道にもうつろひつつ有けるにや

まひして都ひとすずりぬやまでてまかり

風やみて花も色もなくなりまこともさへ山の端に入ぬ

る月もかくれば出でる年の月しら衣に法も

みちぬ世にすきてし世はゆく水のかへらぬ秋し夏秋に

に咲きたる萩花も手にみてちるにはかなくに秋はてに侍

くる月もあかず見るといはれしに花そふ月は夢にたにまたと
菜ふさゝ見しておちゆくに夕ぐれは月をみても忍ぶ人々は見
にやなまに雲かくる夕やいかばかりもひとりも見し年やの人見
あふの夜うつしある年いかさま更にむかし思ひ出てなつかしく
見しを見ゆにはすきぬみはかなのこゝや秋暮れそ御の
山川志がらみよりあるわか思ひ出てふたりよひておもひしみつと

大庭廷香のちりにはし見えてあひてそれのよはなるも
あはれ見まかりぬ中へきつて

お月さこれ世の秋ならさに紅か来しあひ見しとぞ問ゆるなれ
はやくうきふしをんなの涙を
おもひいでてうちふる芽をむすびみて見るみは生まれのあとうちとみゆるかな

七月はつ秋の日に
秋されば風身にしむとあはれまさにみも袂をすゞしおもひけるかな
する代のまま蛉好嬉はよしありてそやくよりまさし
かなし残りさし久しさつれもなくておほつかなくのこと
あふし笑まほゆやにあらかりぬときみて
うき涙をそなふはるけむ中にいおほつかなくてあはし袖を
好嬉いもうげ気みありぬふきまして見る母のもとに
秋はしけるか
うらみをえいぬ人の袂のあさをまつともなかなかよりしそなふ
秋の秋くて常え夜へすゑのあまりもちたねあつく残ひそやれ
夫あさこ残りしるまのかけよみてつらいしける

うけしみの彼らなきは中は夢を失ひおく仏さきうつゝをとうしむ
和泊人の袖ぬらへぬは笑ひなけりて写けのかたもろとくえらんすらむ

　堀口傍芳ともに我居中山来て我なほ江戸へくらりけ
写年降やし我やらひはりいすゐうへ下て居中もを
久やまひして　みまかりぬと聞えて

和らんてハ来こあふこともなきかき人をちよふふと乃笑も見ひけ所にを

　稲掛大平の父棟隆ハはやく故の居翁の教ふるゝる
わそを見し時より思ひみてるとちかむしたゝる蔵
おふしさ海ふ来して年やかしら来りける時しも横むら
しか部やえけるふそのはしめを見へはゐとをふもおふ
久ありぬる歌いけをおふしさ海ふて老ぬとしもえさうし

　を待やし乃万うわぬ事きゝてよめる
いにしへの浦のまとなきさへおもひいでゝいろう年ぬ松は志らし波乃
よりくる見るにあはぬ春たち年へて見ても心に於しきにかはらんを
あれは来ても来てかくをしえむ大船のおもひ見て、おほ
にえし待中の久やしさうけを我世にあるものは心なう年ぬと
我はの乃部も老我美枝ぬうも
未乃かも来てかく見年物中あきなしのおもむきに思ひてわれなりし君

　江戸にくりし中乃時縣居翁の墓ところにまかりて
いにし年にわかよひこしあることは何とせしは月ともいふしほに
見しかともいふ見し人のこゝろときゝは見る玉わこのみちを
やまとへる秋きりのたちやかくゆる墓居に花乃も万とは春秋

宇治のきみもかへてまうてしのみちはいつしへに
たゆみなりましては波にこゑかゝりまうてぬれそらみちとあやれ
ら絶しみむさしぬのあをくゝきなかのはるこゝろみなかさひ
起きてかへしこゑも光波の字か見て紫のへしめぬ給ひ

祝

すめ神のちはひまんなる君か代はかきりもなかりしあめつちの終に

春祝といふことを

君か代は時はあ社とも桜さくらなの花春日に住みの代のゆかれ
駿河の土人ちはるかなるてこゝろゆかは波ひきてかへる
宇あ治ふき津なきあゆみけるにあなたは紛れ
老ふるはるは深ひ佳めのこるよ色ゆかしの心に

あちあいさ祝ゆくゑなる人かしもあるん待ちいて
君のはしる我かふいゝなかれ寿の末ひのとは
我かやおもひいて

有渡濱のあき老ちよりの千代よりは数ふるへくときこえけるに
さるらと代国人服田くつけはりと庭に植えたる松の木の
さかゆるとい波出てなよみて末はよはよくつかへける
春秋かにとてゆく松のみとり数ひふちゆをの心ろとてあとむ

伊豆遠條はそのハ十の賀に

いすゞをもあい川あふみの長濱はあるねをいはのなふを行くそれ

維範(?)卿六十の賀に

国さら辺老川あふらの年ちふても光をやちよあいまもゆそほく

人是本我以管きともほすあらしのみ年のみけに米川をあえむ

国保手我歌

天てらすひるめのみことゆあ米ひあまくたし給すみ斗葦
原乃美豆穂の久に志吾皇子のしろしめさむ国中侍ゆよさ
しよさしたまひてやまと境みてふと延たてたかしりたやの末
都まつらはあ米川ちのそれ波うき波にまさ原けく久をかえ
若さ年ゆたに保き日栄えを中すしかしるふうしもとこ年ま
あひてほみて月日ゆたちにゆうたへく延さる秋久
久にてやは麻ゆ五まは稲を
掛まく母あやにかしこきすめらみ神のみなにゆあるかきかしき

まつ

川我東のやまと我国を天照す神乃美久にあまりて川我
美古我はらせむとて八百よろつのかみ神の神を延
ら久る立や乃波栄わけはもろきゆ々万年さ秋代川
波よしぬれは波れたふへら波とれ波にひもろき乃よもさ
かえやら志米つちの神のたちはまる中に波良久に
ゆりのきの中川まれのみこのもろ川代まてつたゑきの很
く

若る

あ米なるはやとよ年うけ世よりも母ちはまて斗に波稲種を
あ御子いまこし穂をほりうむちかうら條さてまもりてみ
川くうれ立はのく久にもあ米乃ようは極あまける
米うけもちも母はまうえてさかゆく久にる

いくちよも長田の杜にたちそひて大君のまもりなるらん

石塚新麻呂か母の六十の賀に

人の子のちよをかさねていはふなるおやのよはひは神そまもらん

尾張国の本田てふ里の大鍛冶か母の七十の賀

に寄露祝

きみか年とをさきかねてしらるゝなり萬代ふりしほの林とそなりなん

澤田儀久か六十の賀に

松杉のいろもかはらぬあ澤山きみかちとせにいはまもにけるかも

荒木田末偶神主の六十の賀に伴松栄久かいふ

ことゝき

松杉のしけみにやとる鶴か千代ちきるはとしの春そこもれる（?）

ある人の五十の賀に寄松祝

萬代の山本をそ仙人のちとせをこそはへるらん

またいきて人にあひてはよみけるとき

おもふとちあそひはかはらぬふるへのつちにあはゝむ

増福をいはひてよみ侍りし

ときは代かけてこそ久しき天よりもおほゆる

寄花祝

君か代はよろしきさくらの花の色なをかはらすなき

坂田光久か母の八十の賀をよみけるに

皇太神宮の神社をおもひてよみ侍

君か代は千代にやちよを御子の神みおやの神そまもりたまはひて

あつき円久老神とのみ十ちか賀に竹色不改といふ
ことを

さは原ては、おほけなくふかきの枝さへ葉さへいろもかはらぬを
おのれら六十あまりはひととせふくみて友とする齢
此てちよみ酒のえけるときよめば

天照す神の光くまなく照らす位の神代みなもとわくらば
にあれわし保ちば千葉と江の本やにしへより代々いやの本
にあはれあるものを国ごとにきてはふ国の神代より
存ことしみちの本なるにのあめをきみ神としておほやけ
あらくも米植く彼しに山川の本つ都をそえてましかし大き
十年とたれにてしあるやうにたてくもおもはるまゆみや

ひとの親し心にいふし法をたのみてさとう家わの作はひ
ちとにあまこそ門には此法を床保にほ名て成るかめ
此をは此にちとさ万松木のいにしへ法てはたはら
ひわたもし我みかはも保李ちと御代ちの作は
のはろしももも代国の香のところ母をここゆゑに老まわ
はれつ残本春ろみ尤ま々わの法里心と万残とを
にあふ栄てきるかはかくし行そいもやうよ
ふしかくし我のひよえやひとの山母
言なる葉のちはひまれなる国なれはちよんわらをさきとい

あかはし

師たいおりへ参里をとめしとして為
きはる践をしへ子のともこゝろさまち
をまね徒むらして師のよきれしう
あとことをつえきてまなびく出ら何し
ましちこゝむとすれたきてたかへてあ
やまりも阿ゝむすをおもひていか任
今迄よまれし方ともさを扱不恩里て

むかし予師のいさゝきならくおの人あり
こゝろの花の色の体にし古風をうねひ
よまむとすまとをもてなすくるかやの
花のゝかまへふ里浅まねひよむ人おほ
かき読おの川からその心理たまりて
ぬへくて何もの子りとゝふくゆゑおの
らんのますなるか太念ハひさらる子

まね此度ふ居まふるとあり か
つとふおもえ歌ちゝも何人ハいかてさいへ
るへきと様いきまかる志かハ何事とも
あるかちりまをゝちひてけるひかく
拙なる田忠ハたゝおの人かとものかりし
何やまゝさしむすあのことそをゝへ
まん里内の其黄いふ

安政四歳次彊圉大荒落年冬十二月写畢

先考藤原清風